



山灰俵空豆の花の巻ナラセ

今乃向よ雪のそよと紙片しそる
年二頁よんめとほめ事ふりり
息もふ祖父乃も如母の目もき所よ

翁乃心中如斯也

却而止二人の奉るハ下万人の歌之主人の行跡
安しゆれハ其家内是を見習ひ花養紙
好たりと考ま長し生けと好めたおのほの
中序中しるし終り出佳如事終んや主人
多中よあゆえと終り心は厚き事如事



尾端

枇杷園士朗

目録

一 二十五箇條之事

此条ノ下ニ諸集ノ沙汰ヲ附録ス

一 古今色月の事 寂榮ノ内 并諸書ノ内

一 揚句ノ事

一 蘇白ニ白の間理ノ事

一 回自地ノ事

一 回五ノ附方ノ事

一 回語法ノ事

一 回附句ノ事

一 七部集白解 後書 七書ノ内

一 憲ノ白ノ沙汰

- 一 伊勢の冠系白蹄
- 一 七名八種の事大鏡千白式隔連附法花論品々
能譜ノ涉込
- 一 七部系白蹄白杖裁去嫌用捨
系白他季後ノ事
二十ニケ余第ニ
系ニ附解ス

二十五箇條 目錄

- 一 俳諧乃道と云孰る
- 一 たいっい二字此る
- 一 虚實貝乃る
- 一 変化のる
- 一 起定轉合乃る
- 一 叢白切字何る
- 一 照韻字あるる
- 一 中三ノハル義ふのる
- 一 四白目輕きる
- 一 月花乃る

- 一 花小橋つゝゝゝ
- 一 尚季を葉にゝゝ
- 一 二季小わゝゝものゝ
- 一 及白時季用ゝゝ
- 一 及白像やゝのゝ
- 一 附白葉ゝゝゝ
- 一 類向を定ゝゝ
- 一 惠の白乃ゝ
- 一 切字亦口傳阿ゝ
- 一 指合乃ゝ
- 一 幸崎の松乃ゝ
- 一 七鳥亦野の白乃ゝ

- 一 宵冨乃ま
- 一 名所小雜の白乃ま
- 一 かつゝゝ乃ま 并七部内共嫌證白

以上

△ 翁曰左之六品採アスル人ナラテハ道ニ進ミカタシトゾ

- 一 第一器乃まゝまゝを於もの
- 一 拙道子概ゝゝ孫食を忘れ成室を欲不代ゝ人
- 一 早尺十を裁り裁人
- 一 吹玉身乃河ゝゝれハ道を行ひかゝ
- 一 分貝浅くして粒々昔ゝゝ人亦、原冨き不阿ゝゝゝ
- 一 貴典農七月獨りゝゝ人
- 一 博識乃河ゝゝゝゝ和漢の文字に之ゝゝ人

以上

○ 仇諧の及と其の夏 二十五ヶ條ノ部

或人問て曰仇諧ハ何のキ免不まゐるもや答て曰
仇諧亦和を多くさむがた免あり 又問ていふの及
と其の氣めや 又若佛道不達摩阿儒道不莊
子阿りて及の安大有を踏破より奇道不仇諧
阿るもかくのびときと志る時と及る及らて及に
らあふ及る及りて及れども仇諧の及ハ奇連歌の
次より及る心と向上の一歩不踏ぬ及

○ 仇諧二字の事

といふの二字と古来不穿毆金有字書を以て詭と
非乃音くとも或ハ史記の傳紀を以て仇の字あり
穿イキもいふも穿毆金乃理ハ明あり志れとも古今
集より誰の字哉可い事とされいふの教ハ古史
とて誤をも更返り用るものも阿るや 尤ハ雲の
も仇諧と誰の二根阿りられとも其の及るをい
ふ不古人とと看破しきも眼より言ふも及る
と其の不穿も及るれとも其の語不し不及理を志
らバ我及るも今より仇諧の二字も志るも及る
他つ不及りて其の及るも及る

虚実の事

美物と虚小にして実不御く実よ居て虚ト
御く居るは次 実よ已居て人を恨む可なり
証らも花の散るをわがし月のかむをくも
も実不憐しハ連歌の實たり虚よをくも
ていひの實なりともしはなき純といひの
上ハ小嘘をばくともあり虚小実ありを又幸あり
いひ実ありと虚ありを世智辯と云実より實ありを
仁義礼智といふ虚小虚ありをそのを世よ穢す
或ハ又多く居る 此人をばくして実ありのけり又
といふ居る

附録

或書曰 世上人の五徳の常徳より一と一きハ純徳の

心と居る居る 一は凡庸の徳と居る居る 一は
一は清閑の意と居る居るのありありと居る居るハ心より
出たりありありと居るあり

又曰世ありありと居る居る一はやむをくして虚実よ一は
居る居る居る一はとくたりや酒肆淫房の居る居る
おておぬいさくおておぬいさく行高し 油よあやふ
うしんやそれらハ純徳の徳ありと居る居るを居る居る
のありありと居る居る居る

又曰花実とハ虚実のありと居る居る居るの居る居る
教誡とハ虚実と云文書ありと居る居る居る居る
和論と居る居る居る居る居る居る居る居る居る居る
實といふ居る居る居る居る居る居る居る居る居る

孔子も子貢も教へ
言ハ足志 文ハ足言
不言 誰知其心 言ハ
無文 行ハ不遠 トゾ

変化乃中事

文章と云ふハ変化乃中事なり 変化を虚實の自在
をふあり 黑白苦楽と言徳のちやうして思ふに
思ふと云ふも思ふをふと云ふも志づらう言徳乃
変化とて道徳をもとより 黑白一合あり志づら
て地の變化も極あり 人の變化せられは正居
はく地の情あり 心むや 恍惚はこころ妙なるもの天
地四海をこけめらり 春のなれを乃 變化とて 陰
月花の凡情ふりてなるものあり 白なる句は変
化と云ふきこりて又 變化をとおして 變化と云ふ
をゆふれハ 月景のよき 白不建ひて かなの變化を
えしうらなこころと 變化と云ふと 新たなきは
ちと云

人間のよき 小新たふきが如く 又口と心との新古を
て一色の 變化も極あり 變化ハ大に 秘料
の耳く 清く 確く 辛きが如く 徳とよき 次
きとあり 一と云ふも 變化ハ 虚實の 自在と云ふ
ちと云

附

或書曰 名人と上人のさういハ 上と下と 十知の女工 働
名人ハ一字の位を 下なる位を 上なる位を 秘の
天地も 又行ハ 變化せしめて するを せしむと云ふ
て 名神も 歸を する 花も 月も 一と云ふ
況や 秘料の 卓然 信なき人乃 虚實と云
るは ちと云

起定轉合乃事

恍惚と上下取合て齊一音しんゆん——託とハ虚^{コソ}元
界はむしひく念念れりちふ念おを及ぬ白とらぬ
一物及ぬし時ふお影——又生定を及ぬしよはぬハ
一物とらぬあり定の字ありに信の上のしおをけ
お心ありこれハ及ぬ白ハ神あり影と陰あり其ハ
一物——天地より人をまもる——人々天地よ
り御けども志くも天地より物と心を志す也——念と
いふお人及ぬし一物とらぬの字あり人及ぬし——そ
しり変化——山あり川ありて一物とらぬ物就
とらぬありと

及ぬ白の切字有る事

及ぬ白の切字しんゆん及ぬ白の心ありおはるも志やふ
よりて是志やと持ぬしありとらぬハ字と事と
との差ふありとらぬ切字あり及ぬしとらぬ
とらぬ及ぬ白ふとらぬ

和のあまづづらぬ事條の内

世白ふ及ぬ白の心を漏てきしとらぬ切字のふりか
も論及ぬ白の先ハ及ぬ白の字と和をいふ也——

眼み韻字有ま——并作用ノ支

眼と志つり中し白字少く留るるといふはまづハ初ん
一カをあたへり之の字よかふハむかきと先あり

いふし乃らなむつさ——せよのま

く多めく蝶のの着を先ぬる

は白ハ初ら純諧のな味を多つぬる人の純諧名月まぎ
らり——とま——いたるを先ぬる——一様をり——
て蝶の夢をらま——ぬる一与お第一と眼の神を
らバ白字よあまの詮ま——とかくに眼の
白の余情まらこの面ふくあや——まを——眼
乃身拵持まらハ眼の心——ありん祭句ハ容す
眼ハ亭主之位をれハ己らんを^{オウ}取ても祭句と

いし眼——たも草木山川の一字二字の風情を加へて
客の余情をつつはまを——たりけ眼も蝶の一字
ふて尋め——はまを——

附

寂楽集二日眼ハ字眼を定て後款命をまらる——
字眼を確り——と古式ありと白字と好ふ時を上下

乃係なり

讀まらる

八九旬セつらゆ海柳——ハれ

翁

ナそり鳥の圃あり

沾圃

是をその字眼を定めまらる

井川集
井川集 中 水田乃く一の秋は雪
雪——と乳日と代りゆる
嵐竹

是を白と掃の出るるを
字の眼ふけ——とるる

辰よつ

梅うまよの川と口の岬山は

翁

まじりしは雉ふり鳴る

野坡

是祭のふゆと時ふと出るを只
けきとありせきとねり

市申とも白ひやな目の目

凡兆

里もーしと門しの舞

翁

大石田翁

五月ゆをありあてさやー宮と所

岸ふけしをつあく海

是折海のねり折海のねりハ家と云白折植
をねると折るを云とハ海と云白折岸
あくと折るハ折ー無と云るハ海川と云
乃折るに折るの語を云る也ー古式云

吉野山小花 姨捨山は月と折るハ折ー 花よ吉野

月よ姨捨山と云るハ折ー 尤けねねのふ折るん

つをむ

折るね折るのふりー 浦乃を

加生

折る折るのふりーの月 其角

是て折る合乃折るありて合ハ浦小字海子
山ありし折るありてふくふく合ふれと

折る集

折る折るぬ心乃折る也あつし 荷分

折る折るぬ心乃折る也あつし 野水

折る折るぬ心乃折る也あつし 折る

折る折るぬ心乃折る也あつし 折る

折る

折る折るぬ心乃折る也あつし 折る

折る折るぬ心乃折る也あつし 折る

折る折るぬ心乃折る也あつし 折る

折る折るぬ心乃折る也あつし 折る

折る折るぬ心乃折る也あつし 折る

折る折るぬ心乃折る也あつし 折る

窓より何れも見るものも 且 且 藁

是人情の根より人情此根ハ平白ヨリ入申也
その夕何あれさるりまろく根ハ執命の立るるを
無しと申忍しとふハおろふおろきれおろし申へ
一士うのり火をばくさる秋の露 踏水

指の押乃る房つくれ 且 且 藁

是以前の根く以前ハかかるとしてふ字と礎におく
古式に志くおれしを白の根をさるるあれハ上下乃
諦あしと云ふ秋の露をさるるあつて踏く屋
その日 荷分

そら月や露のはくしあふはて 公 翁

是より不系留の根く因りよ不系留あり城の壁とハ
又格をさるるもさるるあふのよ不系留ふはくせられ
しと自れの人あつていぬむ屋うしん

河 舟 係川をせ我店を多の移て

一房の福も吉川くは雪をうしん也 越 人

酒志あつらふこの流り 月 翁

是籍答乃根く籍答の根ハ遠く身を中も格く籍答ハ
客の自乃乃り亭之の自のちと跡の底も遠く
客の答乃亭之根別をくく根根根木の根皆
此の格あり

新麦ハ目しすしめお方そ連うれ 山 店

又お取置り 元さるるう形山子 公 翁

是根乃の白とくけり色しり

浪守乃我若皆乃 破道故乃 風 流

はくさるる世乃ん乃たきもの 公 翁

是草之益乃官乃根乃乃やしりも遠く身を中も

時空の流るるもいふや

管目元

あはれしそんきやや英徳の田舎分

如行

ゆき河のあめし不破のさききぬ

翁

是亭主発白雲の根く更徳しつふまの居所を
所きし例あり赤流の心しつ不破といふ
更徳し所ハ忍しつふまを
その日

炭賣の己の毒の持思う丸

重五

人刀斬しを鏡 塵 寔

荷分

と強むし

鴨鳴や只矢を捨て十四年

去来

双おそそぬやれ乃小刀

嵐雪

是け作格をいふしつ自ぬの人あつて好むるやん

附

或書曰 根よふみと云す

松乃白ト 蕪乃乾ハ 是花ニ植物ト傳ト云

又大うみとハ 翁白を更徳しつて発白トをむぬをいふ

又少うみとハ 翁白の心をいふけつて白と云ふ

又根うみとハ 翁白のいふふ文字連聲相通を云

但病人トといふみとをいふあり

又五根と云ハ 赤流 赤對 比留リ 遠路 對路ニ

又所白十作と云七 虚 實 自 他 多 女 體

用 氣 質 以上ヲ云

又所白十五条トハ 理路 遠身 其人 其場 時分

時候 雜所 景色 白所 定付 心所 寄干

寂 境 白 是ヲ云外ニ 天相 欽和 付 色立木

附

或曰短句ノ丹而てゐるハ百韻子句タリに一塵一句ノ法ナリ

今言ハあけりとしてやみぬと有

コノ巻短句ノ小留ニケルアリ故ニ無別書ニテ且書案ト荷分カ

室ニテニ塵ノ統階ナルニヨツテ短句ノ小留ヲ断スルモノナリ

初懐帝ニ三有足又辛韻免ニ塵ナリ

附作用乃事

烟リハ体 ケフルハ用 處ニハ体 カスムハ用ナリ

思ヒハ体 オモフハ用 守リハ体 マモルハ用ナリ

体ハ物ノ自然ノ体ナリ是日用ノモトダテナリ

用ハ其体ニ應シテ万用ヲ足スヲ云ナリ用ヲタ

ストハ丈体ヲキル於兼ヲ以テ打ナラスコトナリ

句作ニソノニ体用ノ差別混スルトキハ死句ニ至ル

第三ノ小義乃事

并この留りふふのさうきさうきハ一句のさぬ発句乃
やあぬさよ下のさうきさうきハ次発句及まじりま
免やけ短歌さうきさよハのまての字も限らぬと
あさる一はさうきさうきハこの短あさる白の中
より探ひ出さるるに并このさうきをさうきはさうき
りさうきさうきさうきハ一廿一白字留は借文
アリとて式ハ初様式ハ付さるあど押入字かゝる字
及海流まじり短歌と兼世屋うとあさる一

かゝるまじりさうきさうきハ

りつ事の時、あま月居世屋ノ三有一ハ一をいふハ
地中をみたりん発句ハ一さうきさうきはさうき

やんばりつていふいづくもききたるかハ

何 是等の詞をととて置

文 産海物しつて海を 冬文

けらとて疑の詞や 海をうけてやとやの文字
を中申ふもなきとて 是れけらんの格有りけり
知しこのまりのしげきこまのり 志川さし
るく元のちりし可し
あつたあつていしてそのちりしといつての詞をよ
みききしやとてかの世に又も又さうり志りやれと
とて疑の詞をつつとてしるす可し

雲雀啼小回と去むの比あはれや 翁

山雀乃のさしとて 嵐 蘭

あはれや笛もあはれなるもあはれなり 身はう乃
いけうのおきなりとてなる也 雲白十分

根玉分の位きこせ分の位ありとてそそめぬま
いのさの首もせよきけりてとてサに作らつる
也

花 藤馬骨のそねとて 嘆とてり 杜 國

是五文字仮名のサこくふも字仮名のサとハソ
ま上下の五文字のたのふも字仮名のサとハソ
仮名殿 門柱

こまきとてあはれハ仮の馬及門の柱とてふもあ
入るこふもあはれハ也

けりし 札 笛早 杜若

あはれのまきとていふもあはれ入る文字を置へ

此南太のりやとて 珍 碩

けらとてかきふもあはれの入るハソソソソソ
とらとてけらとてあはれとてあはれ

第三作意、法大山杉歌

又中大杉山に有



才三ブリト云ハ
此姿三作ル云

寂茶日所録

○ 藤句他季くはゆりやきり 二十五年外ナリ

かき形くもも捨れししききき

史邦

いね心とねたをいねの足袋

凡兆

道心のおとこいねのつりむしね

去来

池心のおとこいねのつりむしね

凡兆

又深川集ト

洗足に空をく名のつり寒をうね

酒堂

綿籠あしぬきむき乃里

許六

魁鬃階子乃隠をつりひまて

翁

よちとちを侍七程もきしり

嵐南

月の色氷ものよる小新 貴

六

藤赤地の空くりに典薬の駕

堂

相國寺のしんの花乃甚くして

蘭

梳乃乃いゝいゝ。廿餘の竹の子

翁

かく八百乃内報の白形きみして甚くは

好むすめいあゝいゝ一巻のもやゝゝゝ石負

ふこ四 分何のいゝいゝなやゝいゝは志のるる

何を又いゝいゝいゝをいゝいゝいゝ

野水

花とちゝいゝいゝ西念りいゝいゝと着て

公解

又

一後いゝいゝいゝいゝ子 若まり

公羽

子かよむ花のいゝいゝいゝ一既田

珍 碩

かくのいゝいゝ花のいゝいゝたのいゝ白牡丹のいゝいゝ

時いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

いゝいゝ

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

大後日

名をいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

此白牡丹の積りあり 洪曰同香子ハ五白去尤中不
他の香ありいゝいゝ二十白去てもせり 辨たけりいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
遠く附白牡丹格ふては既又いゝいゝ

四句目軽きまき

四句めハ斐前^{フイゼン}中^{チュウ}後^ゴの白あれハ其^シ更^{マシ}大^{ダイ}するの如^ニ有^ルり
軽^カき^キし^シふ^フと^ト祭^{サヒ}招^{サウ}折^{セツ}こ^コ小^コ骨^{ボネ}折^{セツ}る^ル所^トと^トあ^アる^ル一^{イチ}
只^シや^ヤり^リ白^{ハク}き^キし^シふ^フと^ト祭^{サヒ}招^{サウ}折^{セツ}る^ル所^トと^トあ^アる^ル一^{イチ}
此^{コノ}白^{ハク}き^キし^シふ^フと^ト祭^{サヒ}招^{サウ}折^{セツ}る^ル所^トと^トあ^アる^ル一^{イチ}
初^{ハツ}ち^チ祭^{サヒ}白^{ハク}き^キし^シふ^フと^ト祭^{サヒ}招^{サウ}折^{セツ}る^ル所^トと^トあ^アる^ル一^{イチ}
或^シハ^ハ軽^カき^キし^シふ^フと^ト祭^{サヒ}招^{サウ}折^{セツ}る^ル所^トと^トあ^アる^ル一^{イチ}
時^{トキ}ノ^ノ変^{ヘン}化^カを^ヲ志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
一^{イチ}して^{シテ}中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
る^ルを^ヲ志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
る^ルを^ヲ志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ

或云四句目ハ天神ノ御名代ナリト云々

附

或書曰表八句を神道ノ八ツ佛道ノ八相八卦
を^ヲ加^カへ^テ俗^{ソク}ニ^ニ祭^{サヒ}白^{ハク}き^キし^シふ^フと^ト祭^{サヒ}招^{サウ}折^{セツ}る^ル所^トと^トあ^アる^ル一^{イチ}
乃^ノ換^カわ^リお^シよ^リ世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
詩^シヲ^ヲ起^キ定^{テイ}博^{ハク}合^{カフ}と^ト志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
て^テけ^ケり^リや^ヤと^ト志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
怪^{カイ}く^クし^シふ^フと^ト祭^{サヒ}招^{サウ}折^{セツ}る^ル所^トと^トあ^アる^ル一^{イチ}
三^{サン}の^ノ物^{モノ}と^ト天^{テン}地^チ人^{ジン}乃^ノこ^コを^ヲ志^シす^ル也^{ナリ}
八^{ハチ}の^ノ物^{モノ}の^ノ如^ニ初^{ハツ}を^ヲ志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
五^{イチ}句^ク目^メハ^ハ四^シ句^ク目^メより^リ
か^カり^リて^テ志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
五^{イチ}句^ク目^メ七^{シチ}八^{ハチ}句^ク目^メより^リ志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ
に^ニ志^シす^ル也^{ナリ}一^{イチ} 世^セに^ニ中^{チュウ}不^フ下^カの^ノ如^ニ

是ハ花のの花て花の花より花ハ引きて路して花ハ
ハハ花は花といふまゝなり

花を赤いよ月を柳を東 路通

是ハ花のうして月花をむすい多や

翁

是ハ花のうして月花を流ひ多や

出水

旅衣苗小房花をうち拂ひ

羽笠

是ハ花といひ花を流ひと漢物を用ひて是等
とんはるるあまなり

是ハ花といひ花を流ひと漢物を用ひて是等
とんはるるあまなり

去来

此二白ハ花といひ花を流ひと漢物を用ひて是等
とんはるるあまなり

花ハ吉野 吉野ハ花ハ所方
花ハ吉野 吉野ハ花ハ所方
花ハ吉野 吉野ハ花ハ所方
花ハ吉野 吉野ハ花ハ所方

又
花ハ吉野 吉野ハ花ハ所方
花ハ吉野 吉野ハ花ハ所方

又
花ハ吉野 吉野ハ花ハ所方
花ハ吉野 吉野ハ花ハ所方

発句像やゝの事

発句ハ屏風の画と思ふ事一已ハ句を作りて月を因
画ハ推へて見る處一死活木のつらゝありけりおあり
世故ハ能滞するを姿を先一て句を後よまゝとせしむ
趣ハ発句として存念して七月を因て眼をよ見し處
一しゝらゝの四ひはのりてまゝハ又ぬゝの控置て
月よ月とて滞ししんよ白雲とて滞ししハ自ハ他所の
はういひ留る事のとらゝこそ一かゝり一諸集の存念
を以ててつまはらゝ

附 或書曰附句ハ発句の姿を先情を中居るは左に句を以て
能滞を中居るは月を以て又と趣しとて年月の姿情の
情を以てて後よまゝの暗の境ありありはらゝ
二人のやゝのハぬぬぬ志しき哉
不独滞二入
正ニ又ハ姿

附句

前句親句ヨリ又親句ト来レハ 附句疎句ト心得ベシ 親句ト云ハ
シタシクコマカニキヲユメタル句ナリ 疎句トハ眞實ヲ云
シテサラリト云タル句ナリ 親ハ縁言ナトラクハシク離
ナル句ナリ 疎ハ前句ヲ引テトヒテイヒヲトスサテナリ

紹巴亭ニテ連哥滿座ノ后搦菓子出ケレハ

たむきおとろはるるあゝり蔵をり 玄旨

朽木乃ろろろにあもふま 出 紹巴

しりあをきりり 板戸のぬ 被て 昌吃

如是ナレハ連款ヲヤトシテ心ヤサシク句奥アリ能諧ヲ
ウツレルハアリに連款ヲヤブル能諧ハ有マシ能諧ハ外
ノヤウニ思フハ大ナル非ナリ

登白像やの事

登白ハ屏風の画と思ふ也——已々白を作りて目を因
画不^レ准へて見る也——死活たのつろくありけりおあり
世故不^レ能^レ涉もを婆を先——て心を清くま——くけり
越る登白とても所念してて目を穿て眼ふよ見え
——とらふは四ひはのりてま——ハ又ぬるもの控置て
目より入て障——くも白をま——て障——くハ白ハ他所の
はろひ影の影のよ——こそ——か——諸集の所念
を白んてしまはれ——

附 或書曰登白ハ前白の姿を人相を穿てて見は左の形を以て
能^レ涉を穿てて見は左の形を以て見は左の形を以て
信とのよ——て彼を以て暗の境ありありけり
二人の心——ハぬれぬ志——

不^レ独^レ漂^レ二入
正ニヌレニ、毒ニ

附白薬トやの事

登白ハ捨ふ乃のりなりはるるも又ハ捨ふ乃のりなり
小島トぬらよきけり心快くぬれハ趣向也快
我弟対より人もさめて一は捨は物執を以て障白ハ
初念の心より趣向を以て——つ——つ——つ——つ——つ——つ——
趣向を以て——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——
ま——ま——ま——ま——ま——ま——ま——ま——
定ぬるもよハ深く薬——てい——ぬものことけり
らき——けり障白ハ一個子のものけり阿婆を
とて——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——
入る障の——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——
つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——

登りぬけし大なるの附白ハ先いひたぬて後不
思ひ返るに心のむすぬれとて格ふや

附

古人曰附白ハつるアハつるヨシ

又 附白をばけりつるヨシ

又 はくしつるをあらりヨシ

又 ぬれぬるは冠着きまゝ西か

又 細帯を連結するもあつて童戯方なり

或書ニ附白ハつけてけりを端なり

又附くぬきしもの附きまゝなり

キハて附くもの柄とハツる

又白くしにそのめふ^キなるをよむこと

未練なるまうけぬるをよむは

附 籠 籠ノ白ト云々

○ 一白ノウキ用ニタニス器賤道具物ノ名ナト出シテ取合ヲ

云タル白ナリ 秀白ムスヒノ白モ無理ニ云タテヌハ籠ノ

白ニナルナリ

○ 初心ノ人附白スルニハ上キノお裁ヲ附ルヤウニ其場ヲ業スヘシ上

キノ白ハ無理ナキユヘ三白ヘワタラヌモノナリ上キノ次ハナヲヨケシ

此是ハ人々ノソムモノナレハアラソヒ附テ益ナシ

難白ト人モ思ヒ附白トコホル所ハ沉思スヘシムツカシキ

白ニハ早クハ附ル得トナリ 何モ附ヘキ白ハ沉思ノ上ニテ目

出度白有モノナリ難白ニハヨリ所ナキユヘ少シノヨリアハ先ハ

御附ル得カシ時ヲウツシ沉思ニテモメテタキ白ハナキモノ

ナリト御ラレタルヨシ

登りぬたし大なるの附白ハ先いひをぬて格不
思ひ返るハ心のもすぬれとゆて格不や

附

又人日附白ハつらぬアアアアアア

又附白ハはけつアアアア

又はくしうアアアア

又ゆね布子ハ冠着きまアアア

又細帯を連結アアアア童戯方アアア

或書ニ附白ハつけてアアアア

又附白ハ無きハもの附きまアアア

キアアアア附白ハ柄ハアアア

又白アアアアアアアアアア

アアアアアアアアアア

附

真草行乃附方の事

。川音はむアアアア時ハ春

鐘をきアアアアアアア

心知のハアアアア

。且ハアアアア

アアアアアアア

アアアアアア

。象身のアアアア

國ハアアアア

大ハアアアア

附

又皮肉乃連歌

下中

○人ときとくに秋ふらり何ゆき
萩原や陸つと此カクアア
是くハ皮カ折く

○もくむるぶらも袖おのあり
尾とく人神さこの兔の月をこ
き肉のなまこく

○氷くを足しもはまなうら
池さく行くと琴の羽織あて
き器の折くあり

異形通對

○此子のさく紙をこも啼く
弱くうふ草の根さあ又啼おりて

お説連が歌白

○もいさくれハ條のさみで
塚のこく世回のをのこ葉地さ

お説連が

○若乃竹のやかきりゆら
音なれハそれともえん生弱山
あやの折のなまあまに世弱のけいまはうめ

切句連歌

田實啼く雨ぬえのそけさ
丁馬もね東まのり志ねもちて

折くあまの折句のさ

。ゆめを寝しきつては夢を
せり中も夢よすむ虫乃の夢を
是中を夢としてとりて

望のかしよすむ夢のふしとねをてせふあせを恨じ
。秋はさきとあそぶきいぬじ
心かきあぬけしふのおとけ山よてり月をて

又ニ星を原ハヨシ 又海ニ夕ハアシ、
又立ニ百ハヨシ 雨ニカサハアシ、
新ナキ物ニ新有物ハヨシ 新有物ニ新ナキ物ハアシ、
無名ノ鳥ニ名鳥ハヨシ 名鳥ニ無名ノ鳥ハアシ、
志をくし記附白 寂寂

白解石類
敵よ勢もつむね乃春 千里
晨ト一葉子うち鳥帽子若るり 翁

又
山仗を切てかききる園の前 翁
還また衣をあらぬ世乃中 酒堂

又
須麻寺小汗の帷子脱く舞 重五
おのし洞笛をいふく 前兮

又
せりけ小掃てかいらを捨ちし
おもひ切り死くいふ又
又

原井

何れも長安をこれ名利の地
医の多きこを月くさるん
これ七巻のちやにうとまをる

公翁
哉人

冬

秋蟬乃ららよ声きく志つさハ
藤の実はふふ下つちを

蹄水
章五

又

ちりりお帛着てあまの世の事
せーろ二牧も廣きあはる

冬文
哉人

又

龍車一編ふこの先ては
ゆげをくくはてはる水引

去末
嵐雲

須加川お山 又

此れお山と湯やまをくあはる
救生をた下けはる

翁
等窮

二の一意ハ前白ふを残してあまのうの趣向をを
く作を近く取らる一さあつてハ階ぬものなり

牛高お山

牛高あてはるし山を載て
山越りまをよまや 西玉町

調和

醍醐女縣を一巻に乃やまふふはる
屋一うらわ切をたんとあまの
あまのものを欲をたつてあてて巻を

於もこの年乃事

恨うらみまきまき後海ありこもりありて

其人 其角

又

聖まことを歌一首や〜

重五 翁

又

教しん心のけり〜

翁 乙只

又

豆まめ腐つ〜

水 翁

元もとぬら子の枝も〜

笑わら日々のあま〜

其人 旦蒙

原川集

秋乃わ〜

曲翠 酒堂

伊の白日口〜

大勢の中乃人を定る句法

入いこ〜

曲翠 翁

申まを〜

辛崎の松乃草

かり崎乃松を花より掩めて

けみ花白此を原をよきと祭句と才ことおのふ
と名あををよきとや祭句ハ一句の中に曲竹節とある
有りけ句と花ハ曲すて松乃松とハぬや曲竹
の二ハ尋常のこゝに淨海程もあはるるきよや
辛崎の松をよきとおのふ

そハ只ものをよきとよきと曲もあは竹節もあきお
たりけみ花白を世間より留るるらぬのゆは竹節と
もよりきハ初心の人乃端之式ハ舞うるとよきを
舞都^{ニテ}しりふありとハ舞ハ舞言のよきあは花より
ねり面ふいとよきとよきハ侍^{ホウ}舞^{ダイ}ハ^{ホウ}舞^{ダイ}の^{ホウ}舞^{ダイ}

かきしりも舞うるよき

辛崎の松をよきと松乃松

そハ只ものをよきとよきと曲もあは竹節もあきお
たりけみ花白を世間より留るるらぬのゆは竹節と
もよりきハ初心の人乃端之式ハ舞うるとよきを
舞都^{ニテ}しりふありとハ舞ハ舞言のよきあは花より
ねり面ふいとよきとよきハ侍^{ホウ}舞^{ダイ}ハ^{ホウ}舞^{ダイ}の^{ホウ}舞^{ダイ}

けみ花白此を原をよきと祭句と才ことおのふ

と名あををよきとや祭句ハ一句の中に曲竹節とある

有りけ句と花ハ曲すて松乃松とハぬや曲竹
の二ハ尋常のこゝに淨海程もあはるるきよや
辛崎の松をよきとおのふ

そハ只ものをよきとよきと曲もあは竹節もあきお

たりけみ花白を世間より留るるらぬのゆは竹節と
もよりきハ初心の人乃端之式ハ舞うるとよきを
舞都^{ニテ}しりふありとハ舞ハ舞言のよきあは花より
ねり面ふいとよきとよきハ侍^{ホウ}舞^{ダイ}ハ^{ホウ}舞^{ダイ}の^{ホウ}舞^{ダイ}

所係

寂琴二日 名取は名取を所する

河川集

源 草ハ女はつり下屋

酒堂

依見の恋と入相よき

曲翠

是原より依見と申あつて所する

字記法

世々いハ母の影ハの此近 山

許六

底念の温泉水を下り見おらん

李由

是ハ揚中の子ありて所するなりて其力の石まが
らの名不地な何よりも所するなり

河川集

初花より侍部のおとくしのこれゆ

翁

又ぬきとらんや〜宮川乃と

嵐蘭

是侍部といふよき山の名取を所する

是等よりおれいま〜考ふる所

是近二十五年餘

假名づくいの事

切字ノ巻ニ数条アリ

世々一定家々のかつい〜ふもの何事〜も阿まりに
志げき故おほき〜い〜志れが〜昔をかかつい〜の
美もた〜れ〜も〜る〜れ〜大堅おりて
ゆ〜く〜は〜し〜紙〜は〜内〜ふ〜も〜河川ふ〜も
か〜る〜も〜さ〜む〜り〜と〜書〜て〜い〜か〜ゆ〜虫〜の〜絶〜あ〜る
や〜ふ〜て〜り〜ら〜紙〜れ〜い〜と〜ら〜え〜り〜く〜き〜い〜も〜と

い イキク

鯛 鯉ノ類

ひ フヒ

葵 雛ノ類

或ハひあるもひ〜ふ〜も〜け〜れ〜ハ〜か〜ふ〜の〜序〜去〜も〜云〜し
を をむか 山をら

小楠枝の字

を小田

木 おしこ

おろし

編

孫を小を

木の字ハ阿キ

大木尾お

木の字 阿

たは 同上用中

水 上不用中

こ婦の時を下不用中

互 声指の類

又こを乗け時ハ末の字

え 中のえ

杖 机

けしを杖とす古実なり

へ へく

是ハ七八へ小通

栄 ちへ

是ハ古実ハ阿ハ末の類

縁 えむ

けおく衣文の下ホアへノ口傳者

の 不節敷なり

盤 タラ井 器ノ時ナリ

紅 ツレナイ

又井トモ

住居雲ノ夕、ズマヒ、山ノ夕、ズマヒ

法師ホツニホウモトハ古実ハ 入声ホツニナリ

雑 拾 拾ニツハ類更へて入声

ち の類 づふるハハの字形判

右方 仇諧之新式二十有云々條最家

家之 帚目や帚お底柿舎自書而

子去來見之識之可也 自己之仇諧大

干時元禄七甲戌六月日 芭蕉菴

枕書判

右二十五ヶ條ノ名目ニ類セシモノ餘集ヨリ見
 出シテ其各日ノ次々へ加へヌ
 俳諧ノ寂琴集 白雄坊著ノ三卷モノナリ
 或書ニ曰ト云カキ加ハハ諸集ヨリ見出ノ加ナリ
 ト知ルヘシ 二十五ヶ條ト云時ハ是等ニ添
 ナキ本文ト心得ヘシ

寂琴日

○ 六月廿一日

松凡よまらあまなるり〜其海乃碎

羽笠

土質のこ〜あま虫もあつ月

執筆

又

未の穂と秋〜吹風よ吹たぬ種

野坡

馬場の喧嘩の泣よまむ月

嵐雪

是六月廿一日の古式〜こぬれ月ハ折塔〜月をま
 あら〜し月とまををか〜のび〜 礎よお〜あり
 刺さる〜月小あまの月あ〜河の月よ縁のつ
 きき〜ハあ〜し 虫たちあ〜月 樹をゆ〜月
 ぬ〜河よ月のま〜る 縁をま〜ら〜て ち〜縁成
 つきて月〜し〜あまを 礎〜し 礎よ〜あり

是ハ北枝曾良祖翁と山中の温泉小遊ひし時
の事なりあけ句なりゆゆる

浪花の枝折

舌くちむすし柔之時鳥

野童

鬼貫亭を馬樂堂と云

瓢叟

是ハ鬼貫新亭の賀乃御向なり

ひらり

廟すつる勢中不胡蝶のやと傳て

調和

調坐々其乃鈴い 柔不日

系草

場ものに咽かたすすの花ちりま

乙加

柔良い庭つらりハ亭探りぬ

沾圃

是ハ柔白哉留みてなまき時ハかくあけ句不哉留
をも所らるるこ 連歌少々樹小花をそ所

る純情すてハ花ふささるるを所ハゆり 穠小

花を所ハあしししてゆり花まらるるを所
もゆりあししハ所のそし 貞は日あ句の正気め
ゆり少々花ささるるを所ハゆりしとゆり
穠小花ハ所ハきしと所ハ
又曰揚句不初て慈世式ハ初て他季ヲ出ハせぬとゆり

。 懸句二句ハ間理屋の事

あししと所ハさるるもあれ 果

一都もゆりしと所ハさるるもあれ 果

そとをゆりしと所ハさるるもあれ 果
白たししと所ハさるるもあれ 果
ゆりしと所ハさるるもあれ 果

雨の音も傳をけしとハけあゆり

亭之にかくす根の小使

心持ししとゆやし福りよあうを信をそのれ主人
小返きより自のうとふもあゆめしゆめま(うら)こ
友人日福のハ浅川をけりらうとくし故まやらふ
ひくくして一句し風信を附屋

坊より連ハ法由て風をく

是一句乃理屈あり

○ 同意ト云度

前句ヲ附句ニテ叙シタルコトナリ

風も音せぬをよれ淋しき

あつた夕山のくれ長閑さ

是同意と前句ヲサカシタルナリ

〽 願自他乃事

涙ふむいそよれ捲け

梨の花咲くいそよ夕小

雛子におもひ〜女を〜群

け弁踏こ

むらひ大よ尼、涙やか〜ら世

ねん房〜水乃りも泉

さつと〜と碎のこめき〜唯知交

け弁踏こ

並木の文紙のまらりしと彦

巡り礼乃るを抱き〜朝の月

自

時帝

他

他

其場

自

時帝

他

附流

右曲流ノ、凡ユカスハ篇序題ノ、凡ユカス 前句云ナカシタラハ
附句ニテ既リ前句既リナラハ附句ニテ云ナカスヘシ 句コトニ
云ナカシタラハ、コノ味有マシ公篇初テ見シサテ 席ハ中互
タノムサマ 題ハ文ヲマルサマ 曲ハ大方ナリヨルサマ 流ハ成
乾シタルサマト知ヘシ

遍 一白目凡五文字ニ アマ子ニト讀ミ 五句ヘワタル詞ニ五ナリ
序 二白目七文字ニ 上ノ句ヲウケテ次ノ題ヲ出ス 序詞ナリ
題 三白目五文字ニ コニテ其題ヲアラハシテ云所ナリ
曲 四白目七文字ニ コニテ何ソ一曲有コトヲ云所ナリ
流 五白目七文字ニ マスウカニ云ナカシタル詞ヲ云ナリ

右ハ定ラタル詞ノ配ナシ凡其文字ノ長短ニテ何マウニモ云ヘシ
又右白目イワシ一曲有タシ西白目子カラナケレハ腰折ニナルナリ

流云をそいのみよふ賣はきし

自他の意
かより

けあらののかげよ

茶よありむ流をはきぬ

自

人よもいり侍日中の流極守

他自より
かより

あめきねあをよはやくと

他流より
かより

ほろゝと流るる根茎の塵

他の白目
かより

けあらののかげよ

鯨突一二乃滴を何れぞ

他

云ふふる。教ふとまぬ

他流より
かより

歌ハ―や我も浮世をあのど

自心の
かより

けあらののかげよ

又 阿のアふ店をこのふとおのふ

自作

修不日七頃に渡治ふきをい
いふくしき赤くきく奴
とのこゑもむる乃名残に
けこのの介所こな

他の向所
他の巡視
自の自
自の自

と旅尾ありしりねまのつりて
皆くまききく明この夢

其場
自

宥病乃彌吹はくはくく
着るものこゆらりもや秋ち

他
自
自
自

おらけしむちひて終ゆら
志このるるもあつる

他
他の向所

法や先福よ延り下向ら
法や先福よ延り下向ら

他の向所
他の向所

深をそいのみふふ賣はきし

自
自
自

茶よありむ法をはきぬ
人るもいり傳日中の清極守

自
他
他

おらきねあをよはさく
ほらくもるる根茎の塵

他
他
他

けあらの介所こな

他
他
他

鯨突一二乃福を何れ
法かふるる教よきぬ

他
他
自

死かや我も浮世をあのど
け介所こな

自
自
自

又の甲ふ店をこりあとおのふ

自作

あつしをばつをばつと何となくいふもどき

花はよむの巻冊のそよめ

他三

さくも長閑も一ねとくひす

時節

水とて鑑映しとめりやせ

他

かすに自の白も照しとてやとて花も
出ればそこは花の白も照しとて
叶もかすのこも花もをまて照しとて

ふとねとこして日深せり

自

はしりしし侍のいふ言

却

公儀し侍に女房静か

他

かす侍のいふ言
かす侍のいふ言
かす侍のいふ言

侍小折し人をせり
侍小折し人をせり

身をきき水のさゆ

自

舟の舟の舟の舟の舟

自

かすの舟の舟の舟

他

かすの舟の舟の舟
かすの舟の舟の舟
かすの舟の舟の舟

はしりし侍のいふ言

自

降とあし言ふ此の舟

却

月ふたりし食ふ舟

他

かすの舟をりし人

時をいふ中に時をいふも又時をいふ人も時をいふ人も
時をいふ人も時をいふ人も時をいふ人も時をいふ人も
時をいふ人も時をいふ人も時をいふ人も時をいふ人も

阿彌陀佛志の十の夕日かたやき 自

おききし車しりんりる 自

たんとおききし内成いえの 撒 他

か甲しに車しり出てもそこにはおきき人あつたやう

自の自しりて他の自をむらうらる

阿彌陀佛志の十の夕日かたやき 自

二句の向の主人をとおしりる

先ももつたしりるそおきそのまはりしりる時

時時かち相あつたしりる

自れむむしりる

味をしりる

よらしりる
阿彌陀佛志の十の夕日かたやき 自
先ももつたしりるそおきそのまはりしりる時
時時かち相あつたしりる
自れむむしりる
味をしりる

二句人情つとききりる

時方時申すおきりのを

人情いしりる

免角し句の射しりる

阿彌陀佛志の十の夕日かたやき 自

又曰おききしりる

又曰阿方有用しりる

有用の所しりる

又曰差別しりる

時方時申すおきりのを

阿彌陀佛志の十の夕日かたやき 自

又曰おききしりる

なりぬ御借あり是自由自在乃道なりと弔に
去矣

又曰調格有りいと申。真調行調草格なり
世之つり九品の御借をせし新羅万像天
地巨徴のつりて御借ありてつりてつりて

又曰世邦おのりあり我志壯元禄二年より常の御
借といえりつりてつりてつりてつりてつりて
つりてつりてつりてつりてつりてつりて

加陽鳥翠臺

北枝書

此評白前八寂琴集ノ内ナリ 花守ノ短冊ヨリ未傍
源山ノ琴ト云小本ニテス十八千北枝ノ所持ノ書本ナリ

又寂琴本の部

枕西五車残門の馬はあはれ 其場

跡をともえそやかき流川筋

赤くすききしり焼のさや 可成の

爪屋ふりり双六乃石

目をくすくす入相れり 時分

温の香よ曇る朝日漸くよ

雨の松門田の籾を穂よ出く 時節

時を都りて啼て通るるり

雲たごぬ空を回近く風流て 天相

青天み有月月の影ゆけ

いりも人懐る月白なり

・ 又柳とハ野山海川あをいふ

藤白語路乃咤寂寂并附白の事翁七書

花つこ

歌乃門不ぬし取麻ふりり
かき清も夢い路中の地龜堂
妻あ忘すし山丈の芭
曾良
露九
翁

顔塞

いゆかふ忘も志の危き立踏をこれ
既芭をかくて出る糸物
農明女畏山門量の下方丈
岱水
翁
許六

共伝衣

衣方の外障を履らつるねこて
に徳しとさあるる系のか
露沾
沾荷

八月より居新ひきも武者一人
翁

善治

屋と空を一夜も思をばし世ふ
傾城乳をかく寸何と相
雪乃拂ふ鐘に人乃影うつり
荷分
昌桂
雨桐

とまふ

舞と鬘の虫の何んたり
浪局の里をりしあまの
逢ういぬよりもの出合
支考
丈草
翁

与見方

此景をよも尺をこし深山寺
乳人用と念の骨をよみおん
其角
我峯

志くやうみ其はさりりも論まそ

嵐雪

あし

垣壁のけしきを病ハあゆま

翁

あやみふかふ妹々夕ふりた

越人

阿の雲ハあや流法こむそ

翁

海舟

津雲とま暮るるちよかつき道

曾良

小袖たうぬを還る戒の師

不玉

日く顔の物ハ似きもおし

翁

大津の巻

栲衣を脱ぎて更今乃糸よ

松洞

くうれきもあし別て日をり

奇香

矢負は腕のこもる。恋 狂

翁

いんの色

ま比須海綿の袴をよは腕て

猿 雖

喧嘩の中をよは腕て川こ

雪 芝

志やませし矢橋乃船よは腕て

翁

花つ

鳴子おしるく行藪のやぶ

釣 雪

盗人小法身そふ妹ハ此を伝て

翁

祈りもはきぬ圓し女神

曾 良

々

せりまむしるをくすの餅

其 角

はらまらりや道場の海を足あして

淡 石

着るものやうて、ハル骨の麻衣

琴風

己く克

母しく矢洲の河原を打返す

翁

多賀の好子もりのことなき

半銭

子枕子男もそいでし河原組

土芳

作賀の事

鳥乃巣もむし任あし庵

翁

二月や房より甲あもみくそ

兼夕

阿ししとそ了るやこののり

曾良

未来記

高田乃宣筑もむむしく

其角

夏をきし関乃孫六ぬきそね

嵐雪

きくふきん乃石草へす

翁

山中の事

あしき傳たる山も菅乃す

北枝

指女ゆき人田舎わく

曾良

そらちよふ恋しよ君も名もりて

翁

熱田の事

鳥羽より切切女夢よりあし

叩端

志をらん得る。廿一年八月

翁

秋を程も味あそもの答ひり

桐葉

是の事を流るるに降るとあそび

次 公卿七書附白之住解救写

○ 霜月也鶴カウのけり〜ありひて

そは朝日ありぬあり〜

弟妹の巻

此振は、おふ人の、種とて、まゝ名高、まゝ、決り、その、名也
二の、用も、さる、ふ〜 升六、さる、白、信、解、ふ、ふ、の、後、
是を、解、まゝ、時、却、て、廿二、名、まゝ、名、ゆ、と、ひ、く、よ、き、
注、さ、る、名、一、大、元、ま、の、名、と、い、ふ、い、う、く、い、ひ、か、
み、て、解、ゆ、い、ゆ、ら、る、ま、の、お、あ、ら、れ、は、ま、を、お、せ、ま、み、た、が、
ま、の、や、名、も、け、あ、ま、の、白、乃、細、結、ふ、至、り、て、初、て、正、風、の、ま、的、
を、ゆ、ら、れ、ら、る、ま、や、将、ゆ、け、振、ゆ、り、ゆ、れ、と、い、う、く、正、元、乃、
い、く、に、な、ゆ、れ、の、巻、中、ま、古、酒、の、振、真、此、残、り、ま、ま、
ま、ま、結、ま、ま、ま、此、ま、ま、甚、何、ま、ま、ま、の、や、ね、け、振、結、ゆ、
つ、く、ま、ま、い、ま、ま、白、ゆ、り、の、酒、房、ま、ま、に、韻、字、ま、ま、

あ、ん、急、あ、り、り、り、と、い、ひ、は、な、る、也、是を、振、の、弟、妹、と、云
柀、振、ゆ、ま、ま、真、行、草、乃、三、神、有、り、我、師、東、更、に、
月居ま、ま、け、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、白、ハ、天、マ、マ、マ、形、あ、ま、ま、の、也、振
ハ、地、マ、マ、マ、の、ま、ま、ま、ま、の、を、司、マ、の、ま、ま、ま、ま、を、司、マ、て、初、ま、
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、の、あ、ま、ま、ま、ま、ま、と、初、ま、ま、ま、
韻、字、ま、ま、
以、て、尚、マ、マ、マ、を、本、式、と、し、お、式、ハ、則、真、神、也、初、ま、
ま、ま、ま、の、初、マ、ハ、畧、式、あ、れ、ハ、け、振、の、ま、ま、
か、ま、ま、初、マ、ハ、假、名、ま、ま、ま、ハ、字、神、マ、又、ハ、
風、吹、マ、マ、マ、ハ、假、名、ま、ま、ま、も、假、名、ま、ま、ま、と、定、マ、ま、
行、神、マ、
身、三、ハ、振、マ、ハ、振、か、り、マ、初、マ、マ、を、司、マ、ま、ま、
初、マ、
式、マ、中、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、
用、マ、マ、ハ、け、假、名、初、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、マ、
是、マ、マ、マ、の、真、神、マ、

花乃咲身ふらう草花はぬらぬ

秋も志ぬらう 露のつぐまぬ

公卿

登向ハ海幸人々をふらうききりて花の力加像伴
あまきりてありぬけ人をさしせふ用ひのばふ人の
前も立て國の政もあらうしむき人あふぬ
葉の那の中にかききりておひりしおふ老のふら
をさうらひやふれども人あふらてはさうあり
がさきあふまきりしたるひなも貴貴しき身を
かくやさしきうゆりてそのおふ花のつぐまぬ
を秋もききりあつひあふく 露ハあふを
人のをさしきりてさしきりてさしきりて入たるは
秋も志ぬらう 露のつぐまぬ 秋も志ぬらう
あまきりてありぬけし 露のつぐまぬ 秋も志ぬらう
のうをさしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
る有て口よをのつぐまぬ 露のつぐまぬ 秋も志ぬらう

厚ぐぬも静まきけハかきぬら

酒志ひふらふけさうハ月

公卿

け酒志ひふらふけさうハ月 厚ぐぬも静まきけハかきぬら
秋も志ぬらう 露のつぐまぬ 秋も志ぬらう
あまきりてありぬけし 露のつぐまぬ 秋も志ぬらう
のうをさしきりてさしきりてさしきりてさしきりて

美底もぬらうてを木の枝哉

小春も眉のくごくは表虫

公卿

美底もぬらうてを木の枝哉 小春も眉のくごくは表虫
秋も志ぬらう 露のつぐまぬ 秋も志ぬらう
あまきりてありぬけし 露のつぐまぬ 秋も志ぬらう
のうをさしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
梅もあふて日永く梅今いさう

セタ乃八月をものけしりし

登向ハ有のすあ。秋 掃きし掃家 中を
の第本を打てや掃むしつあを日中各あり乃
後おしんをきき。会の又まや。庭ふ小笹振の
まああしのちりかりてセタのあうりそんまは
風情すこよて見えこり志も花の陰も
くちこよん人乃。も縁心をはくる

荻株や水田のく一乃秋の雲

著このは田代ゆる序

衣くつ柵下ハ馬のさきうも

箱

登白田野の秋を画りうか

箱ハ序を

くくつしり せきをせめしにを
きりしうる 衣くつ柵下ハと登向振乃
優艶 下を河く下古馬のさきうりて

滑結者の初をうて打りしそのれあう。縁上
よく人のあもあ非ありや

年とるき不立小杭の花か

勝よのをきうれ装色の本拈

宵の月よくあふ人よる

翁

登向ハ年忘れの佳句は曲水の宴の味びて
たりもききしや 掃き其たふ平家ありか
出りさあり 中ハ結し縁あり
一 登ハ結りし時 装色かきありし
小其あハ凡流のえをくをてめてあう
まし、其の装色はきしこみもせぬ
高し、其入きし。志きもの。治あ

雪のねをきしち見ハ装色

路とよき音を辨し一も大木の陰に身を隠し
くはりしき橋の穂あとの地をぬ

石もまたあまの海池のり

白雲の巾より礎をあらうとて 翁

祭向ハ代代の甲いづれを移し月まなむかきうと
根をまたへいもくし一紀をのひのべしめれど井ま
心より大まきまのしんかかちかちあてたき代
ゆいづる國として石もまたあまの海池のり
井こまのり終してらねの巾より井出する
碓の終しとあれどもあまの海池のり

笈四句乃の終 任ハ二十五条ニ有

菫原の美を初狩人此矢も負て

北乃は門のたし一あけの春

すこいあまをよけあて狩まのくあれハ菫原の美
を矢のよきし一けりしうらあまのくも狩人の
獲るをさひて國のちあまのたし一あけの春をれ
ゆいづる也り一紀もまたえ又ハけ狩人の侍原のり
とるしあ一たし一あまのくも狩人の侍原のり
かきしあまのりしあまのくも狩人の侍原のり

田螺ゆき乃の終 乃のあまのり

久はあまのりしあまのり 翁

西のあまのりしあまのり 翁
公のあまのりしあまのり 翁
あまのりしあまのり 翁
あまのりしあまのり 翁

旅人の風かきゆ〜春のうらみ

たねもあつめちのりけ 翁

すこぬま白く滅す御階のをしひあゝる
西の月いそぐ〜をりあせ〜ふりそる
御白いか〜るに白き〜風を合
御のあ〜るも御命を節〜す〜飛
あゝるまきを風よたか〜つけ御階の秋〜
はそ〜あ〜るをち〜る〜け旅のあ〜る
ふ〜〜〜

野屋ありの大徳もゆ〜すゆ〜

山の何あ〜〜〜〜 翁

けこのを〜い〜る〜四句目を〜入〜河いあけ
ま〜もたのつ〜あ〜る〜春の色有り〜る〜ま
此句の語地白いか〜る〜る〜る〜る〜る

夏をい〜る〜橋を〜け〜初

門〜小教出ん 月のた〜る 翁

オ〜い〜る〜あ〜る〜橋〜い〜る〜あ〜る〜も
は〜あ〜る〜ふ〜る〜〜〜橋を夏をい〜る〜あ〜る
〜あ〜る〜四句目を〜る〜は〜る〜あ〜る
は〜る〜あ〜る〜あ〜る〜橋〜い〜る〜あ〜る
〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る〜一句の〜る〜下屋あ〜る
の〜る〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る

家前を〜る〜あ〜る〜あ〜る

上の〜る〜あ〜る〜あ〜る

是は炭俵の一種なり 家前を〜る〜あ〜る
〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る
〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る〜あ〜る

第五句目の部

雁 見る窓乃月かまらぬ

風吹ぬ秋の日籠み酒ふき日

古例ハカク唐の橋をさるる事一 亦白ハ詩人おど
の窓ありは独坐して月下の雲を極め拓るる事
五句めハ秋の日は暁しきに風も吹ぬ籠み酒ふき
寂莫の事ふく籠めはあきなり 詩ハ他ハ

桂のまみ宮をやりぬ秋の

銀し一踏賞り月を 海

四句目ハ朝敵乃まめれさめてむりふ宮を居し
まららん時桂のまめさせて宮をかくしなる軍士
のれましけく五句目残りしなり 賞人なまし銀
小塔賞り不却合ありに桂只人なり 次居人とすし
きり

昔よりをけりる系乃り

入月の居化粧いさむ 武老い

前句出ぬあつたをまめしを借籠るの日記を
る系を出さしむしをそしたにゆきけりぬ昔いあみ
ぬれきくもぬく 五句目ハ山を居る武老と見て
あやしき姿の者北る系をけり入月の小くきく
けりくめええぬしゆしりはあてし 見事
いやしきぬ武老一騎居けりしゆしりはあてし
人ありむしゆ合あり

門の顔出し月めたり

雲けも秋の口くせ乃出せ

あつた月のさるる時くもあれと秋の口くせ
のくもあつたかりてかき白くゆきぬく
と降出しりなりの天をく宮りはあてし

みどり

山野小飢て餘をむさぼる
次四と井の月み伯夷うは佳し

赤白帛の籬老日いありで風花の人と見
伯夷う首^ユ山^ユ山^ユの巖を喰ひ終り飢て死する古
を思ひ君子ハ渴しても盗泉の水飲せしこと
終るに飲まざるも此伯夷の志と
清^{ケツ}潔^{ケツ}の人も且ハ洗ふならむと清^{ケツ}の徳あり
盗泉を盗みしことわらむも終るに可し

古調

西瓜を後とてむりやめく

恣^{カシ}いうみ宮城^{ミヤノ}の^カが^シ吹^フ風^ハを
赤白ハ終るに其^カ後^シ白^クの^カが^シハ秋^ノの^カが^シ
ら^カら^シあり^カせ^シ秋^ノの^カが^シと^カし^テ餘^ヲ
お^カし^テも^カ田^ノ舎^ヲめ^テい^ハふ^カめ^ル

その日

二の尻と一近侍の花乃^カ盡^スき
地^ノを^カむ^カら^シと^カし^テ鼻^ヲか^シむ

前句二の尻と一近侍の花乃^カ盡^スき
人の^カも^カか^シて^カし^テ自^ラも^カ怒^ルを^カり^カる^カの
は昔^ノ終^ルと^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの
君^ノ家^ノを^カし^テ一^カか^シむ^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの
ハ里^ノと^カし^テ一^カか^シむ^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの
と^カし^テ一^カか^シむ^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの

おくれ飛鳥花乃かけぬ入
其^カを^カし^テ一^カか^シむ^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの

花^ノを^カし^テ一^カか^シむ^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの
し^テ一^カか^シむ^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの
を^カし^テ一^カか^シむ^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの
を^カし^テ一^カか^シむ^カら^シい^ハ人^ノを^カた^シて^カし^テま^カる^カの

けし白かへ戻く殺味は——湖き——に——つた
そち終ふりしゆをさる程にぬをりしつて
口吐してしつても何しり次

秋の田を刈らるるものせりて 人

はいしあ——うらなふはあ—— 翁

赤白地境田代よしれきゆてつりまもみふ農家の
去りもあぬいふやあむりぬものうちあつたにたみし
むり——くくよさい——向ふあふらぬく所牧氣を
あ——れあふらあふら——

いふぬ——尾之節のあきま 人

馳まきよ——のぬかへてかつかき 翁

あせあをのふ乃病うちなるしつあを——女のけり
人程世体をつ——き——つああ——あきあをあわだ
人々も態勝も自由あしつきをさか——馳まきよの

をを——うふ——うふを——下にあ——あ

花の以儘まきあひま 翁

田——を——うらて 翁

深きいふらふ人合あり 徳をまふのあ——とらふ
人い——に徳をまふあ——人う何し次只花を
つけあふ——つけ——れあひ——人あぬばあ——より佛
心あふ——もあらぬけぬは田か——うらうては解
うらぬ——それい——もあぬ徳をまふ——ああ白
を——あ——て田——を——何のあ人をあふ
せあぬらるる 翁 海川のまきあふの徳を

隣をかきて車 川 翁

うき人を担穀垣よむらうらせし 翁

吉お境の仲にかねてを月いああなきよ——を——あ

忍い車山井のりむとくみまふかきね車の喜共忍ハ
一はみ廣の宮の川かき一はまよあかきも井水とち
てむふいたぬとも忍ふ身あぬ夫を入るき
あかしてつかせむと思ひりひて相穀粒より
入車とてはみ抱き竹の葉の粒も忍ふきを
相穀粒をそくせりせきあしと意のせりある結
とてこり且いき人とつみよも忍ふたり忍
しふおの忠告よりりてははらみ人意の乃びき
あし河の波も忍ふ一はあかきも
青の天とては月月の影も
あし

湖水の妝乃は良の神也
けの語合れなりて一は忍ふは月の中つ月を
これあぬは影もも忍ふあかりあも忍ふ
まも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ
まも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ

つよに細子をきけて湖水の妝と所るを
句のゆりも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ
あかきも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ
あかきも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ

布子着あふぬ乃ゆかぐれ
押合ふてあかきも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ
布子給のねあつらあかきも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ
あかきも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ
あかきも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ

袂を乃七尾のあははき
あかきも忍ふ一はあかきも忍ふあかりあ

是も翁のよきに名高きし所合ありお白もよき白
那も能也のそをのそをいふも信ううら世はふ
少玉の星ありて雪も高しそを深うら世はふ
いと少海ありて奥のそをさこあるれがわつ所うい
味ちかま有りいふみ解ももは白此物をお
ひるあいばげぬばるのそはね

僧やいふも寺にかつれ
猿高の枝し世を狩る秋の日

是はたがひみ志まゝの海合あり傍も寺も有り
猿高も高しぬく一句甚高所感^{カガ}阿ま有り
てつちがそあふ水こぼり
戸隙子も世にがこひのそをなす
お白はれれう白も初ハ雀其の向うりしと白あり
しをそをのそもつごいやくねふるもね

ぬむいふはありけきもそもいふはありけき
しそれりしそりしそを無を水もわつそそそ
そまおは見えそり所合ハうそ命あり
おそしとそ^{ワラフ}後そ他も月東あり

又虫をふししは起し初秋
是もそをそそ所向うし信ふ正風の御傍のそあり
お白はありしそそを他もそは内のも
そをぬしそそそそを初他もそそそそ
や初秋のそそそそ見ゆ

はらあましそそそそ廣き板敷
よの初に風遠まる花のそそ
は白も誠又正風のそそ西月し所合ハありのそそに下
お白もそそそそに風遠しそそそそそそ
花のそそそそそそそそそそそそ

きくかきし中ぐも目前のかき一人の句を作ら
れらるる句の中ぐも目前のかき一人の句を作ら

何を見ゆるみもやめばなりと

花とちゆ身ハ西念う衣着て

例の観想の神に世乃申ハ何を足るも中ぐも
何もかきし中ぐも目前のかき一人の句を作ら
れらるる句の中ぐも目前のかき一人の句を作ら

稲乃葉近入りちりうあき凡

癸心れば一欠不裁、鈴麻山

菊白ハ何するあき白あゆを川たこして何のせし
去一人の思ふるゆえうて俄は癸心一先葉玉の
方を振りさむして初て鈴麻山を裁き
との海合なり

唯礼死ぬる、乃の神を

何よりも城のつづりあき凡

及終る死れの花を死をさうばうり意あら
む定しよるも末も信あゆ一只城の何心なく
て更死骸のどを飛まりは、着ふり何してつづ
るぞ程意あき、ゆえうて下あふくみてた、あ白小
かり、次りて死して死をさうばうり意あら
む定しよるも末も信あゆ一只城の何心なく
て更死骸のどを飛まりは、着ふり何してつづ
るぞ程意あき、ゆえうて下あふくみてた、あ白小

月東しふりハ月

花と唐のやハあゆハ末拵て

菊白あき、ゆえうて下あふくみてた、あ白小
かり、次りて死して死をさうばうり意あら
む定しよるも末も信あゆ一只城の何心なく
て更死骸のどを飛まりは、着ふり何してつづ
るぞ程意あき、ゆえうて下あふくみてた、あ白小

未拈うとて秋意つゆもあまよきとて次目出及
所合こぼしつらうハアアえきまきし形り

糸糸のくもも 紅鞆ベリ打あま

山伏を斬て掛きし隊界の女

前向の甲と世の中 乱きうりき時高と見て
陣まきし中 陣まきう向を作らしかくのあかひのせん
つよのうらな 安宅しつる 論乃中ふ山伏哉
斬まりしとつる 有る付もあつる
今くもや隊軍羽織を着連立

まきの袴くし 袴もかくるし

前向ハ侍の子ももの若く同士う同く軍羽織を着
はぬて 経律シ 章 甚るるく外見と見てむうらな
まきの陣乃見ゆに 見つけらるる かくる
さぬの 所合なり 是人情世性或曰惟く字前句ノ
字は是仕腹こト前ノ
ノ玉ハトソ

室のハ鳴く 尋 ありつ

階上奥ハ花より月のはまゝに

室乃ハ花よりまゝにみちのくつて一句を
ゆえきるるまなれと川をさるる花とさぬしを
をひかへたる 秋しとあり

畠乃才ハ 稲 一つ

畠井ハ 熊 追ては夕月也

是等ハ白の熊子をよみ合をきく 所合ハ畠の中ふ
稲つよハ 畠 熊ハ 井 追ては夕月也 稲子とむら
ちとむら 稲子とむら

熊乃の中ハ 稲 一つ

此所合ハ 熊ハ 稲子とむら 稲子とむら
とむら 稲子とむら 稲子とむら

まじ煙りたなえぬらちた又かの人を焼く桶を
持てまじらふや 粧むやうき世の中げまじき
の華しくつら世の人焼杯あまじらう 時々のま
りまじものこけし 郭公を死ぬのたをちとつあま
河まじまじらふあまじらうま

息は火かきと下しお 河ま

老きまはいは心慮よりおふかた

おふかたよりおふかたのよあぬておふかた
くまは人あふ心と目をしてしつてしつて例の
格くしつてふハゆゑおふかたの老人のあま
おしつてしつてふハゆゑおふかたの老人のあま
人をハゆゑおふかたの老人のあま
みまじらふあまじらふあまじらふあま
らしつてしつてふハゆゑおふかたの老人のあま
らまじらふあまじらふあまじらふあま

松山乃腰を擲^たの嘆り

焙^たの山尻を下し川舟

お山の裾川ふま岸灘^たの嘆りの中を焙^たの
山尻をつて下る舟く春景色まじらふに画意よ入
焙^たの山尻ハ画意もまじらふ

目のまじらふ先 ありハてやうて
まじらふまじらふまじらふまじらふ

目^{チヤウドウ}小童腫^{チヤウドウ}有人ハ大将^{チヤウドウ}あまみまじらふ
らまじらふまじらふまじらふまじらふ
しまじらふまじらふまじらふまじらふ
しまじらふまじらふまじらふまじらふ
まじらふまじらふまじらふまじらふ
まじらふまじらふまじらふまじらふ
まじらふまじらふまじらふまじらふ
まじらふまじらふまじらふまじらふ

羊足 伏見の地雪 結るき 杖の末

伏見 阿そりりの 古の雪の月

皮皇は世の地雪 結りて 杖の末 伏見阿そりり
古の雪の月 阿そりり 又りて 杖の末 古の雪
結るき 杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末

阿そりり 杖の末 阿そりり

杖の末 阿そりり 杖の末

杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末

素良 阿そりり 杖の末 阿そりり

杖の末 阿そりり 杖の末

杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末

杖の末 阿そりり 杖の末

杖の末 阿そりり 杖の末

杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末
杖の末 阿そりり 杖の末 阿そりり 杖の末

争言なりけるをあらはしものに出し合のこ
ふかりて細傳のまほふ阿のまほふをあらは
おのけらる神二記とて一神記のまほふをあらは

町に流のつらきと碎て花乃法

門て押 義、士世の合佛

ナラんし一集異のいきれを吹返し 公麻

初の白ハ所云の連てて花乃つらきと碎ら
とつらき中の白ありてハ壬午の合佛ふ集らつらと碎
きつらや 後の白大み精し一集異編をあらはして富に
れらぬくつらぬ神合共流神言

多し居る中し一 勝れつらふ

江戸のたむしみの亭子のぬらぬ

お白踏あふ人のとく一疾くあらふ白く後白く人
らるるしやうおふ人と見て一疾行ぬば一ぬたら

の恋一きた向一のふるさのやう一まて物物おどを
けらるのおかきり一まらぬの法合なり

隣一もあらせ次婦を連ててまて

屋ゆりかゆぬとゆの草菓子盆

け二白ふ人情世態ことごとくしらとらつらぬ一 お家ほれ
おあふとけほれともあらまらぬあらぬとて婦を連て
まらぬとて後白ハあらぬとてまらぬとて神記ふと
まらぬとて後白の人の何のあらぬとては一おけ
屋ゆり一せしとらげふ菓子盆の具ゆとて
おハおれとてあらしとてしらとてまらぬとてお原
まらぬとてあらしとてしらとてまらぬとてお原
いふ一おらぬとてあらぬとてお原いふ一人人情世態ふら
まらぬとてあらぬとてお原いふ一人人情世態ふら
まらぬとてあらぬとてお原いふ一人人情世態ふら

妹をよいふとららりや

修教のまらぬとららりや

是又人情世態をそとせり なる言房後の御借の世
りそとせりをそとせり 久敷縁まきなる世を
思ひの弁士のあつてまらりぬて 改下 御侯御意は
先條しに 御女房の類しすまがもくもくあま
て更るしをまきせきしもの所ごらなり

家のなごめし 強を見より

蹴汁 悪いものよりよきもの

是も又おの御分てお向の大氷の流と見て蹴の尻
山あり 蹴汁なきて皆さち 喰らひさぬこそは
連る此老人もそ美の老よりよき喰ひしよ
をししや しゃげんききし 家の流れし 功を
見よりんと連る立ししもの御分あり

堀小門の敷 五十石 取

け鳩の跡 鬼もよとす 月と花

北園おとれ五十五石のくけなりたらすはあて門横
たごりく又他りなり 金井に 鎌長刀をかざり
まもるあり ちれは 後向ふて 侍侍の仕立
と見して 室ふけ 侍の跡 鬼もよとす 月と花
おとれくしとく 月と花とくふさくありあは
侍さくあり 侍のまて 一句の表は 月花のまて
いふまて 鬼神も 侍あり 侍とく
一句のまて 侍とく 侍とく 侍とく 侍とく
侍とく

毎乃葉又 少侍 埋てたもりき

阿いぬしつあり 門のあつて

前らたもたも 義徳の侍あり 少侍のりし 袂け
ハぬ方より 毎のまあり 侍あり 侍あり 侍あり
まぬほしに 侍あり 侍あり 侍あり 侍あり
んて 侍あり 侍あり 侍あり 侍あり 侍あり

馬一疋を海を渡ける

小舟のちの時のつらき人

と痛くありぬハ女房をさす

氣

二の白深き白き一落の白ハ清純なりしつちの時
つらぬく男ありは今ハ家ありおせ女房をも
おせしつちのときどかしておせし痛もぬくお
の男なりしハ女房をさす人の初めを

阿の樓の故に、きり

二乃丸のさくかやハ今も

中もあつてほむの歌目

大木の根より樹木のつらあり樹木のさめとんて
二のぬめハ今も屏引也一さくめやハ猪熊の足
をぬくつら一落の白ハ歌ありハ一はさくさく

錯の掃除あり奇麗ありしは侍の姿も
あれハ一もゆてしつち今も屏の白より
てさくめやハ安んぬかハ白をいしつち
一落の白の心ありハ白をいしつち
まなく大なるものとも

一里の船も夜のまき

山を此の蜜柑の色ハ黄も成て

け白葉大ハ芭蕉白葉小なりしつち
とつちと伴賀の相雨ハ蜜柑の色ハ
成出してけ合のつちの白あり
後さくめやハ梅の今もさくめ
太ハ男子なりしつちけ白ハも
祭向もさくめはつちの白も
け白もさくめはつちの白も
つちの白もさくめはつちの白も

夷海より船もかき次船渡りこの年忌もけり
こゝろも可し〜船〜心代〜心代〜心代〜心代〜心代
折細〜折細〜折細〜折細〜折細

陸よりさきある宿 留り舟

ありあけ合へ舟めり船の意をつてその上
折細〜折細〜折細〜折細〜折細
向の舟〜舟〜舟〜舟〜舟
ちかちか舟〜舟〜舟〜舟〜舟の又妙

け一父やと原の此年貢

七十ふあるをよ〜即投拵

舟向原の多〜舟〜舟〜舟〜舟〜舟
折細〜折細〜折細〜折細〜折細
折細〜折細〜折細〜折細〜折細
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向

舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向

舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向

舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向

舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向
舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向

舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向

舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向

舟向〜舟向〜舟向〜舟向〜舟向

美し親ハ人乃きあなり

あふ

方丈ハ後も喰りくし宗あり

身白

笑喰いハ還俗不似し宗あり

身白

知乃しきし誠志あり

恋歌

方丈の後ハ悲恋ナリトテかきアリ

きのあ乃るるをあ笑ひ

あふ

妙店にのゆひを中をゆく

身白

是方白ノ巻ノ挿一刺違ふタリ昨日ノコトヲ今日モ
後立ナラハ男ノ威持ニテ已ニタ其魚ハト云テカユヒ脊
中ヲサシツクヘキナルニキノフノコトハナカレテ笑ヒ乱ル
カ房ニ四カノイカリナヲオサマラヌ又ヨリサシツケテハ
有意オタヤカナラス分有ヘシ

おれおれハ灯々消えて

あふ

美穂一紙く鑑入く見て

身白

方白第ノ存物語ナラ後白ヨリハ美濃近江ノ軒ヲ並
ハタル家ニ美我經ノ邸等ナトノ都落ナルカ堅ヲヘメテ
泊リタルカ夜フケ人シツマリテ主人ノ行括ナトヒソカニ
語り合フ侍ト見ナシテノ附意ナリ者ノ至ニ紙ケ
タル證置置前ニシニマツノ作ミルカコトシ

又二和吟ハ石ニ擲掛テ詠メ居タル女ノ句ニ

ぞふつものつても十雨乃山

身白

コノ附白判者評曰負救ノ遠ナリ石ニ擲掛テ心ヨク
詠メ居タルサマニドウ様テモト云ニ甚苦シキ心ムキ
有故ハ百雨ノ金子ヲ以テ買タル山ヲドウツモツテモ
十雨サヘナヒト云カナラテハドウノ色オサマラス
又拾雨ノ山ヲ心ヨリ詠ムルナラハツヒ様ツテモ百雨
ノ山トモアラニカ

ツ故ホノカニ云ソメタル心ノ惑ヲ行田舎ノ人ノカタムキニ
思ヒソコチヒタルナラシカマシテヤ前句二句カラミテナト
云ソレハ一座ノ扱ト云ニ惑ノ句ヨリ怪重ヲ是一白ハ
深ク一白ハ浅ク或ハ惑ノ句ヲ奈ノ物ニタト一或ハ惑
詞ヲ用ハサレ氏其姿ニ惑ヲ見セタルナト

或説ニ娘モミ惑ナラハ公ヌコモ惑ナラシ女若惑ナラ
ハ男モ惑ナラシト是ハ世ニ云鉄樵論ノ沙汰モ有
ト是ハ官所ノ扱ニミテ風雅ノ論ニハアルヘカラス
サト云娘ト云自然ト聲情ノヒキ有テ男ノ扱ニテ
ヨレ細ニテ大象モ扱系カル、ノイマシメハナシ世上モ
水カケ論ニ宗近サナラハ息モ男モ惑トセシヤカ、ル
理論ニ乃フ時ハ風雅ノ天然ハ棚へ揚テ火管口ノ中ノ

遊ナラシニカシ一梳ノ葉ヲアタメムニハ

能風ノ異ナルハ雅音曲ノ異ナルカユトタ依此ノ各各
量ナル人ヲシテヨロコバセムヨリ一已ノ樂ヲ極ルニハミカ
スサレハ句上ニ毫ヲ入テ一已ノ格調ヲ守ル時ハ人ヨロ
コヒ集ルナリ

凡附句ハソツトキヲサテ當キノワカル如シ音ナキハ
附遠ク還ルハイトウルサシ

又曰句ハ七分ニテ三分ハ併ニ残スヘシ

右句論氏ニ諸抄ノ註ト引合取捨ハ可為其意

七名トハ有心附専秋遠白起情向附松子色立也
 八辨トハ其人其場時分時節時眞天想面影ナリ
 有心附 大なるあれと其多と下とあり トアラニ
 二相手ハ商人ト趣而ヲ定メ損シタ門ニ衆ルト句ヲ作
 一ハ商人ハ先キニシテ衆ハ後キナリ前後ニ上キト下
 キ有 専秋ハ我ノムツカシキヲ程ヨク陳ラズニ
 専秋ト云明ニテハトテラヘモ変化ノ自由ナレハ是ヲ
 俳諧ノ地下名附テ一巻ノ變化ハコノ専秋ニヨルヘシ
 二名あり〜〜乃 喧嘩の如くけ〜
 正倉院と云々〜 虫の穴 蟬
 途行ハ同神別名ニシテ風雨寒暖時分時長ノ争ヲ
 云ハ途行ハ短ク専秋ハ長シ安ニ別名ノ故ヲ云ルヘシ

名月よゝのなき〜山乃草
 ぬき〜ぬふを〜麻〜
 又向附ト云夏有心附ノ別名ト考ヘシ
 秋商人の鹿も〜
 火を掃きて〜
 起情トハ縮レハ三五句キニ伸レハ五句モ七句モ伸ルナリ
 前白ノ詞ノアマヲトカメ各理ニ指シタレハ此名ヲ起情ト云
 サレハ向附ハ縮ル用ニシテ起情ハ伸ル用ト知ルヘシ
 村妻乃あぢ〜
 系ハ狐〜
 松子ハ語法ノ勢ニシテ前白ノ次母ニアスナリ
 一息〜
 二石〜

朽ちゆく川風流をささげ浪
色立ハ景色ノ取アハセナリ

起るをえまきふとこもよ出りし
石をちりりし白川のみ

八神ニ其人トハ貴賤老少衣食貧富ヲ見ワケ
テ有心附ト同意トスルヘシ

今日も流世乃喰鐘を叩
泣くしとあ枕角也と云

其場トハ前白ノ山海家内家外ノハコトヲ見分
大方尊教ノ所方ト知ルヘシ

今日も流世乃喰鐘を叩
揚子の竿ノ小舟又草の花

時分トハ晦日朔日昼夜朝暮明暗ノ沙汰ヲ云之

朽ちゆく川風流をささげ浪
高かきやと鳥と雪の気

時節ハ春夏秋冬を五節ノ行書ヲ云時分時節
ノ二件ハ有心附又ハ尊教モ有ヘシ

捨門ハ辰の別より言ふ
風をくたの渡着るわと

時回ハ其時世ノ風俗其座其日ノ奥ノ流合モ有
賣多め乃新も自中よ毎の鍵

之報しとも抄りつと
天想トハ日月星辰風雨寒と暖ノ詞ヲ云テ多

ハ逢向ノ用ト知ルヘシ

繪馬を見よとて天永三年

ねのまゆみも暇くも少なき將

觀相トハ白コトノ變ニシテ一座ヲ慎ニ附方ナリ

袴門ハ辰ノ刻ヨリ着方ナリ

叩きしを奪ふ所ナリ

面影ハ觀相ニ似テ古来此ニ夫々ノ面影ヲ寄ナカラ

耳目ニタヌマワリヲ專一トスヘシ

師トモ親トモもめし和尙さぬ

保え乃春日花さくからぬ

七名ノ貞ニ對附ト云案方アトトモ是ハ曲節ノ變

ニテ公式ノ名ニハ定カタシ

高乃功者み家を持也

親ハ位將も寺乃表アセ

是全ニ前白ノ尊ナレハ詞ハ對ニシテ二句一意ナリ

袴門ハ辰の刻ヨリ着方ナリ

むすえぬ糸も袖もとかぬ

當季ヲカクシ法

陸子の月も毎ふさぬ

細布も衣のやあそをからふ

悲戀

けりかきに女もあつむ全料

あしゆあそへハあかぬ石麻

是等ハ他門ノ句作ナリ

七名ハ袴ナトノ詭白名目凡他門ニ用ル前ナリ

大鏡曰

独病てゑ其乃間むるも腕乃月
端端をてきゆれ行 燈
秋暮秋の序前より久坂を氣
風只れか城の志門より

傳曰本或子句第二卷目三返連附一可必有る一
是則海連附の付よりて大切の要あり夫をかり小
所合せしより長句と長句を附短句と短句を附
るなり 其の向々清氣新境は風俗なる傳授は
実ありして解さむるも澄とつゆはなり

物々みをとるも 立きくおふき流る

あみくくみり 供乃侍

源平の物不自由の基所

原氏源二の巻紫のとれおきよりて源平た近の侍
なり紫のよと格ふの法よりて物々みの詞よりこと
有りけお侍よりよりもよお重を略守板け侍拂の巻
のし息平の物乃まのふきお等しりれは源平を改て
紫のよとつるも是と句乃海りなり

花の侍

鬼貫獨と曰花は梅氣とつてとて二花あふぬと何て
是れあつたよなはれ花は河を所して花といひりやと
花は入る事ふと云 近奉を梅を以て花とすより
不防の中ふ心ひて花といとて何し 小の他の花は

△或書曰

恍惚ハ命物ノ極ヲ示シテ一塵一卷ヲ洞シハサレ合
ノ子ル系ハ命諦ニ嫌ノ用於有コト也喻ハ人倫ニ
田抄細抄麦刈因利モ其用ト成テ人倫ニアラス
医者ハ流リヲ又ト云其名ハカリ打テト云モ此人倫ニ
大ユツカヒハ云ニオヨバズ猶ノ足大ユハ附又ト云モ人倫
ナラス其職分ト知ヘシ掃除テ猶ノ居所ト云モ思
我ノ中哉ニアラス是其場ナリ喻ハ扇ニ物ヲ中ト
云向ハ書白カ云鬼ナレハ雜ナリ早竟ハ其白ノ神ト
用トヲ見分テ其白ノ司ル所ヲ見テ知ヘシ
又曰道理ト理屈ト云モ虚空ニ居ノ相對成ヲ知ヘシ
理屈ニ人ヲ云伏ハ恍惚ニアラス道理ニ人ヲナヒカスヘシ
トシ

喻ハ黄蓮ハ苦ニト云ハニヨリ甘ガラスト云カ如シ
世情トハ子在ノ多キヲマカミシト云ハニヨリ縁ヤカナリ
トハ言葉ノツヤナルヲヤ

△或書曰

身あわりのくちをもちとけし
美しきれと胃のしよまより

又

寒具錢のあやうぬくちハ縁こらひて
死んた昔はしりまこりまてある



七部集差合差嫌用捨證句

月卜月次
ノ月用捨

西川集 辰柿舎良興 朱源守の巻
月ノ下苞乃生氣乃下氣ノ

表二白月

お糸ハ月ノ下まてハ あり

様心妻方のお乃巻

同

同二白

馬曳て旅ハ初ノ月ノ下
二月ノ下ノ禮もよこはら

能諧集 大津 奇香亭

昼卜月ノ
カコシ

亮白

白の紐取脚靴 益 同哉

サシ

その月ノ氣を藥にたこひて

月卜日ノ
ササシ

ササシ

そのりや素良坂の巻をけきふく一而る

おしー 廿日やきま乃粉

大州

汎木

外高

々

翁

尚白

羽笠

且藁

杜國

翁

翁

惟然

翁

あ考

如風

同

同

月卜
カコシ

月卜
カコシ

子ハ意あふまはる〜 記此月

その日 常夏のおのり巻を 吾口の巻

そのりや素良坂の巻をけきふく一而る

宮の白牡丹を綴る乃 急籠て

後様よのまのおやあての巻

庭の白牡丹を綴る乃 急籠て

庭の白牡丹を綴る乃 急籠て

御傍集

客破事乃 不 巻 乃 月

巻はしり 吾もあふも物あ

記此こよの巻の巻

滝 隙乃 不 法乃 新 何 じ

屋やまそし月をむし一の氣あり

小文庫

業言

肌さき隣のお葉を何あて

翁

坊屋あゆつとききく音の月

史邦

猿のまきのぬのまき

はしよつきまき。月の縁を

元北

心よりまき。今朝乃後ま

吉来

日原汁梅のまき

秋をまきあきまき。月しゆも

池水

ふ代煙くまき。まき。まき

翁

わの日和まきのまき。まきのまき

蓮池まきのまき。まき。まき

杜回

月三合
東打歌

廿二日

五月日

月外書
打歌

月外書
打歌

月三合
打歌

月外書
打歌

月外書
打歌

月まき。まきのまき。まきのまき

荷分

心はよまきのまき

腕人の月かきゆ。まき。まき

曲水

月付て何の内まき乃 司 石

珠碩

熱田まきのまき

鞆朝乃まき。まきの月凌く

叩つてまき。まきのまき

白くまきのまき

まきのまきのまき。まきのまき

翁

まきのまきのまき。まきのまき

晋子

市才まきのまき

苗魚のまき。まきのまき

吉来

猿の猿と毒と怪し。秋乃月

出のち妙也

あつしやゆゆ浦ふけて夕まみ

月もも開面をとりし海舟

その目ね白風乃巻

日東の雪ふつちり月をそそ

中しち種をとまきむ霞而色赤

牛の乳をぬらふそのの夕まみ

箕下猿の笑をいそしむ

身よりいりしそのまもむるし

子き掛り足跡の雪乃巻

標下小願あつぬの夕まみ

辰

辰

月良

色又

辰

杜小

分

分

辰

夕
月

月
夕

夕
月

夕
月

夕
月

夕
月

夕
月

夕
月

夕
月

望まて河あり 螢火のけ
初月より星の娘の形通ひ
只所の中ゆく 荊袖をく
影を乃ま流す 大ハ鶴のけ南をい
御紙集 吾鳥種れのみ

まそそあぬちりしり出て 螢 竹
只ふくそ開とふし月二つ
船つりしにけし 社あゆし

猿のまのわや乃巻
まそそあぬちりしり出て 螢 竹
只ふくそ開とふし月二つ
船つりしにけし 社あゆし

まの目 題句、月二句有一
北窓

日笑

知足

辰

重辰

恒考

木洞

辰

お考

曲羽

夕
月

夕
月

夕
月

乾夕ト
井部

乾夕の若葉のふめり物杞桂て
一取れをハ馬のあきあけ也
此水

諺曰乾夕ト云ハ若夕ト云ハハ子卯也
若夕月あき月を伴月次の月也

月乾秀
井部

文月やちりも若のあきハ水
若をのせきも 桐乃一葉
此柳

表ニ相ト
松ニ木有

乾夕月あき月を伴月次の月也
延垂乃小舟をとせとて 碓
鳥乃つむいふ山を又せとて
此竹
布囊

久乃日

乾夕降也

けみろ物て月さく若乃重乃下
此國

根氷也

氷ぬみゆくも乃稿妻
を五

表ニ木

そのあき物也のまき

表乃木

素良物や細く山乃公を楢
旦藁

表乃木

ねんよもまきぬ若の海の碓
此草

一橋

表乃木

花咲て七日鬱るる 林蔭のりね
其角

表乃木

枝見くくもき 桐乃若と刈
其角

表乃木

江戸橋心かよりいしく町也

表乃木

根のり 淋昔 蟬の鳴 若

表乃木

冬草や人さうも市乃物

表乃木

ねんよもまきぬ若の海

表三草

早會

根子

下植乃くくつは蒲菊のちあ

ち方シロ

蓮の葉をさゆれとけのく頃

発白草

水仙と見し向をそよゆりり

ち方メロ

獲ゆつゝな糸瓜のくく子

発白子

夕まや草又よゆをともふ花

ち方月日

輝よ徳草よよ庭の待れよ

表生草二

子鳥掛

発白

星條の園を又もくや時ふき

ち方メ

園乃ちちあをくく月のほのく

発白

徳士山田氏の亭よよあき

発白

水窮時く人のくくや依屋泊

六方メ

あゆそゆ、標きり、亭

降おこ

各の日

やわり

初雪のくくも積着てかす

表

やわしと出ていふのき

表

舟をゆつて置候も、あ

表

城くくあも夕まのくけ

表

小松と徳仙一ゆり又あがき

表

虫乃侘者を、之流縁乃下

表

柱あなハ柱あよ新を隠しえ

表

かきみみ根裁人七のき

表

又六町布納ニ新家んて

表

表

飛水

葉々

月二句

句

句

句

句

句

句

句

句

里人よ葦をほとよみ社乃る

月あきし原よを石とく橋

あらしの木の根よ花の館よ

汎るるるを乃湯泉乃山

地のをきて乃是

まそのの峰の舟乃月乃け

草の夜をよる今卒乃け

破隙乃於録鬼の傍乃集

是昔乃をこらあきまつしとあ

同表ニ生れニラ

地のをきてゆしきおそ

二厥喜乃思木の鳴きあうりて

哉人

相笠

equal 水

旦葦

を文

子

旦葦

equal 水

equal 水

equal 人

はしし人を忍びたり子

阿の地自外をりて水乃を

以の地西も亦も陸乃を

さうりあうりる利根乃川乃

をの口乃てりしとてかき

その日をわりの

其直乃すりに口乃固つく白

おろし蓮の実立了葦の実

熱田ニ秋仙海乃れこの

降雨の老乃母乃後この

其名の二丈二日とらり目を

而直其之はり河東なるみ

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 人

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

萱蓮

ニラ

後三日

ウ

業

ウス

おろし

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

equal 兮

業

笠をきて衣乃破き綴り正指
曰草のまき

相茶

暖言
おれ

田畑より然り童乃阿とてふ
月夕そら雲の束相の下弦はけて

相茶
叩端

三三笛
カキ
コシ

およそて女は蟹木くりりりり
すあれ一笛乃りら一のまをりり

茶
茶

曰板のまれのまき

坤

日中山雉子の雛の遊之まて

叩端

口

清水をまらふ馬扱扱乃日

深水

口

面ふき北さ小船賣る字の上

東辰

口
おれ
ニラニ

おのまやけ小舟も我堀り
猿の西来乃何をま扱を

端
端

口
口

蝉鳴てまは法神の杜乃
その屋くみりみる北尾の琴

山
山

一ツ橋七口扇るのまき

おれ
おれ
おれ

名りを隣ハ扱くりそのまら

工流

山
水
コシ

星衣ふくハ虫のうらそらて
せりて扱ま乃水の流

清風

あらし此降をこふ山寺

斎

其伝衣夕照ノ巻

おれ
おれ
おれ

柴乃笈り筆をあやとて

茶
茶

おれ
おれ
おれ

山寺とて言ふ狐乃り入て

茶
茶

花形まやし酒造

茶
茶

夕を脱日しほき

茶
茶

白餞 統御をうけとて 詠へてよりのあはれ

居ノヨシ
ウ九

月清く夕を洗ふこ寸の輝
花咲て人しあはれ。草一乃唐
近逢

月ノ影
ヨシ東ノ
ヨシ東ノ

おつけハ去の心あはれ月晴て
あはれをうけとて。水乃 昔
蓬

巻布
ヨシ東ノ
スミシ

鳥りて野後いゝと秋の露
日ほたる心くさりのそ
高

園ノ影
ニ夜ハヨシ
ニヨシ

夢を占きく園の影
ハニ夜とりのほくし侍
溜子

心ノ影
ヨシ東ノ

一歩の連をうけとてむけさ
雪の気熱の社は後後をうけハ
子

心ノ影
ヨシ東ノ

秋山の依物を送る。吾ノくハ
高

コシ
おれ

優波塞々御廟つとむる文讀
高

おれ
おれ

高人起も水いづり
、

居ノヨシ

破戸乃釘打つけ。そ乃末
人

モヨク

店と海しき麦乃川
人

表ノ影
ヨシ東ノ

家あて服をうけとて十寸鏡
鹿島紀行もあはれ
人

盃ノ影
ヨシ東ノ

盃を行く人を行く
若

秀ノ影
トアリ

々々々々々々々々々々々々々々々々
友
依

袋衣素紙 皇祖相良侍所亭

ウナクメ

信之舟

コシ

花橋水ト舟ノコシアリ

伊達衣カク目録の巻

まゆり佛伽り泣かせし月
かき記舟をほろく多形

首良

第一字

コシ

チコシ

四五日月を又ききし蜚乃家

廿秋乃枕 赤アリ

赤襖ノ

コシ

おるい好く

コシ

そとハ終節一巻りの世一して
因を四つあしわすくもあき葉の
夕月夜露をとりしるにつき流て

残東

新新

コシ

新新

コシ

多胡碑集の巻
よ記石尺八佛きりまみし

羊残

僧り製判る 多巻の夕暮

之園

仙洲集巻也香の巻

及色ノ

コシ

毛中道ノ

コシ

馬の鞍ふりてゆりさくくえ
物の親上申さく

暮

柳家

虫ノ字

コシ

秋ノ実おる虫喰り
星道くある馬の足 蹟

乙別

玄哉

大ノ字

コシ

小ノ字

コシ

大膽小思いくつ甘ぬ巻
小力の恰ぬある細工 巻

刀奈奈山巻あつぬ瓜乃巻

畑ニ山ニ池ニ 若おね高風巻五巻ニラ

女持形を
オシリ字
巻中陪

たむし草をもらりりりり
虫々ふはせしと啼やえ
行是しりあ履もりあ

私 願
正 秀
碩

流池集抄目三鳥亭

表コシ芥み 祭句を乃山家 才三形を彦彦
初秋 コシ
石塔を凡そ今秋ハコ出

表送了字ニ
祭句

やあ〜と出さふふ月の雪
さう〜と脚まをまの疎
ウハタ
ナヲ九
けし〜いなきあ乃甚思

慈 心

巻中家お

所ニツ
ナヲ七
ナヲ

續猿の音のねやあそ
おあ〜と足は〜あ〜矢木の河
虫筆つる糸糸乃角の海草所

お 老
惟 然

ほニツ
ウヲ
ニヲ六

熱田と秋イ〜しのを
ねん乃雪にほをさつ〜し
ふりあて君〜ほ雪よゆ〜

黄 白
為

大ニツ
ウヲ
ナヲ

先ののさか石〜やのま
中〜つ〜大の〜に花折て
中〜あ〜す〜山大の〜

一ツ橋

雪ニツ
ウヲ
ナヲ二

雪〜の梅やちり〜に花〜
雪〜の雪〜乃山

舉 白
工 流

袖は袖
ひる

四月のあゝ衣のゆるゆるの極乃る
肩てや〜なふかき果の乾
足も〜に甘草の種ハふ〜てけ丸

雪
ふ

春と秋葉衣着て袖の毛を前氏の人
やと清く雪に白く石の産産と曇す

ウラ
後
連

残のよう侍思なりふ秋の風
あうね海干し 窓の西しけ

おん草

月の
おの
ま

おのま〜〜とぬき〜〜見のま
おのま〜〜とぬき〜〜見のま

オ
マ

おのま〜〜とぬき〜〜見のま

地名
其
カス

おのま〜〜とぬき〜〜見のま

花
下
見

花下見〜〜とぬき〜〜見のま

花下見〜〜とぬき〜〜見のま

花下見〜〜とぬき〜〜見のま

他穀風京〜〜とぬき〜〜見のま

又内作の〜〜とぬき〜〜見のま

不届の〜〜とぬき〜〜見のま

ほろの〜〜とぬき〜〜見のま

おん草
おん草
おん草
おん草

おん草
おん草
おん草
おん草

物は秘、 肉はあゝの糸をのちの櫃乃巻

Handwritten cursive text, likely a transcription of a poem or a letter, written in a dense, flowing style.

柳林葉流

物は秘、 肉はあゝの糸をのちの櫃乃巻

一花さくく 二麦 山吹

凡の恋と情縁の記を和らそ

雨乃ちと雷ととととととと

送るあふ くるあふ

さうさうさうさうさうさうさう

中々さうさうさうさうさうさう

か〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

不のぬ年や誠も悠りや

上流と通ふぬ程のあやうし

そつと現れしはるの夜中

静けな夜も静けな月

菊千角
赤光
一人巻

いふの
おのの
パリ

乃碩
正英
乃碩

佐山
利牛
小お

1. 花の香りのするはな
 2. 花の香りのするはな
 3. 花の香りのするはな
 4. 花の香りのするはな
 5. 花の香りのするはな
 6. 花の香りのするはな
 7. 花の香りのするはな
 8. 花の香りのするはな
 9. 花の香りのするはな
 10. 花の香りのするはな

花の香りのするはな

自 十一 佛志と移の上とくはハヤヨ
 化 十二 花ら一ハも迄ヨリ
 化 ナラ 花の香りのするはな
 花の香りのするはな
 花の香りのするはな
 花の香りのするはな
 花の香りのするはな
 花の香りのするはな
 花の香りのするはな
 花の香りのするはな
 花の香りのするはな

花の香りのするはな

右翁一代縣白、内前書後ノ類少ナカス
然レトモ多ハヌガシモアリノ能味フテ知ルヘシ
心得ニテニ其ル増如斯

文政十一戊子暮稿

